

〔教育実践報告〕

「基礎演習」における「女性学ゼミ」の実験（6）

小 森 治 夫

はじめに

- I. 「基礎演習」における「女性学ゼミ」の概要
- II. 「基礎演習」において観賞したビデオ
- III. 学生による「女性学ゼミ」の評価（1）
- IV. 学生による「女性学ゼミ」の評価（2）
- V. 学生による「女性学ゼミ」の評価（3）

おわりに

はじめに

『商経論叢』第49号では、「『基礎演習』における『女性学ゼミ』の実験」と題する拙論において、また『商経論叢』第50号では、「『基礎演習』における『女性学ゼミ』の実験（4）」と題する拙論において、「女性学」をテーマにとりあげた「基礎演習」におけるゼミナール活動について簡単な報告をした。

それに続いて、この小論においては、今年度（2000年度）の4～7月に行った、1年生の「基礎演習」における「女性学」ゼミの実験について報告することとしたい。

I. 「基礎演習」における「女性学ゼミ」の概要

まず、商経学科の教育体系の中で、「基礎演習」がどのように位置づけられているかについて、簡単に説明しておきたい。

「基礎演習」は、第一部1年生の前期に行われるゼミナール入門編である。「基礎演習」では、大学における学問と研究の方法、すなわち、ゼミ活動の中心をなすレジュメのまとめ方と報告の仕方、ゼミ討論の組織の仕方、そして個人研究テーマの選び方、文献検索の方法、論文の書き方などを、コンピュータの活用方法を含めて学ぶ。また、「基礎演習」には、友だちづくりの基礎単位としての意味をもたせようとしている。

後期からは、本格的なゼミナール活動である「演習Ⅰ」が始まる。各教員はゼミナールのテー

マを掲げて、ゼミ生を募集する。学生は自分の学びたいテーマのゼミナールを選択する。このゼミは「卒業研究」まで一貫している。

2年生の前期には、「演習Ⅰ」に引き続いて「演習Ⅱ」がある。そして、後期からは「卒業研究」となり、ここで各人の卒業論文をまとめることとなる。

次に、「基礎演習」のゼミナール編成についても、簡単に説明しておきたい。

この「基礎演習」は、1995年度の改革で一度は廃止されたのであるが、2年間の教育実践の結果、「基礎演習」は入学当初の友だちづくりの基礎単位としてやはり必要ということで、1997年度に復活した科目である。

1997～98年度の2年間は、教員の負担増も勘案して2年に1度、「基礎演習」を担当することになった。つまり、経済専攻3名、経営情報専攻3名の教員が「基礎演習」を担当することとなった結果、1ゼミナールが14～15名という、本学のゼミナールとしてはやや多めの人数となってしまった。

そこで、1999年度からは、教員全員が「基礎演習」担当することにより、1ゼミナールの人数を8～10名と小人数にすることにした。

私は、1998年度の「基礎演習」では、3冊のテキストを大急ぎで輪読したのであるが、1999年度からはこの間に収集した「女性学」に関するビデオを活用することにした。視覚的でイメージがつかみやすい、「女性学」ゼミナールを創る実験をしてみたいと思ったからである。

2000年度もこの「ビデオで女性学」の基本方針を踏襲した。

Ⅱ. 「基礎演習」において観賞したビデオ

まず、「基礎演習」の日程を紹介すると、次のとおりである。12回の「基礎演習」で、16本のビデオを観賞して、ゼミ討論を行った。

- 4月13日(木) 「課外授業ようこそ先輩 田嶋陽子が語る男と女」
- 4月20日(木) 「おとことおんなの生活学③ 男女の共生」
「おとことおんなの生活学④ 人生のパートナーを求めて」
- 4月27日(木) 「オモシロ学問人生 男らしさにさようなら」
- 5月11日(木) 「男と女の境界線……その性をとりもどす時」
- 5月18日(木) 「孤立する母親たち① 育て方がわからない」
「孤立する母親たち② 子育てを楽しむには」
- 5月25日(木) 「少子社会ニッポン① なぜ子どもは減り続けるのか」
- 6月1日(木) 「少子社会ニッポン② 少子の時代をどう生きる」

小森：「基礎演習」における「女性学ゼミ」の実験（6）

- 6月8日（木） 「揺れる男と女③ 10代の性体験36%」
6月15日（木） 「揺れる男と女① 中絶経験43%」
6月22日（木） 「子供を育てられない母親たち」
6月29日（木） 「なぜ男の子が救えなかったのか」
「真人君はなぜ死んだ」
7月13日（木） 「妻を殴る夫」
「夫が妻を殴る時……崩壊する現代の夫婦像」

次に、「基礎演習」において観賞したビデオについて、紹介しておきたい。

まず、「田嶋陽子が語る男と女」は、NHKで放映されている「課外授業ようこそ先輩」シリーズの1本である。この番組は、有名人が自分の母校を訪ねて1日教師をするというものであるが、このビデオはフェミニストとしてTV番組等で有名になった、法政大学の田嶋陽子教授が出演したものである。田嶋氏はあるクイズを出題することによって、小学生でさえも、いわゆる「男らしさ」「女らしさ」の常識にとらわれていることを痛感させる。また、田嶋氏の生い立ち、とくに母との葛藤についても個人史が語られ、なぜ彼女が激的なフェミニストとなったのかの謎も明かされる。

次に、高等学校の「家庭一般」に対応して企画された、NHK教育セミナー「おとことおんなの生活学」から、第3回の「男女の共生」と第4回の「人生のパートナーを求めて」を観賞した。「男女の共生」は、社会や文化がつくりあげてきた性差や性役割を見直そうというものである。ジェンダーとセックスの違いを明らかにして、「男らしさ」「女らしさ」に縛られた生き方を乗り越えとともに、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分担を見直すことにより、男女共同参画社会の実現を求めている。「人生のパートナーを求めて」は、人生における結婚の意味は何か、パートナーに何を求めるかを考えさせようとする。未婚化、晩婚化が進み、離婚率が上昇する中で、従来の結婚観が大きくゆらぎ、とくに男女の結婚観のミスマッチが拡大して、「結婚できない男性」が増えている。それゆえ、結婚は“ゴールイン”ではなく、良きパートナーとしての“スタート”である。

「男らしさにさようなら」は、NHKで放映されている「オモシロ学問人生」シリーズの1本である。この番組は、ユニークな研究者とその研究内容を紹介する番組であるが、このビデオは男性学のパイオニアとして著書『男性学入門』で一躍有名になった、大阪大学の伊藤公雄教授が出演したものである。1990年代は「男性問題」の時代と喝破した伊藤氏が、男性の「自立度」をチェックする方法（「妻のパンツを外で干せますか？」）を伝授しつつ、「男らしさ」の鎧を脱ぐことをすすめるというものである。

「男と女の境界線……その性にとりもどす時」は、最近、話題となっている性同一性障害に悩む

男女の物語である。生まれもった男体や女体に違和感をもちつづけ、「私の肉体はまちがっている」と、心と身体とが引き裂かれた症状をもつ人たちに、日本でもようやく医療としての性転換手術が認められた。性同一性障害に悩む3人の男女を事例に、性とは何か、「男らしさ」「女らしさ」とは何かを深く考えさせる好番組である。

「孤立する母親たち」は、NHK教育で放映されている「教育トゥデイ」シリーズの2回連続の番組である。第1回の「育て方がわからない」では、なぜ若い母親が子育ての中で不安を感じ、孤立するのか、その現状を探っている。第2回の「子育てを楽しむには」では、どうすれば母親たちが辛い子育てから抜け出せるのか、さまざまな取り組み、例えば身近な同世代の母親グループでイジメが生じないようなルールづくりや、父親が保育所に集まり育児に積極的に関わっている事例、を紹介している。

「少子社会ニッポン」は、NHKの2回連続の特集番組である。スタジオに30歳代の独身、既婚（子どもあり、子どもなし）の男女数十名を招いて、取材したVTRを見せて、ディスカッションをさせる番組である。第1回は「なぜ子どもは減り続けるのか」をテーマに、少子化が進む原因を明らかにするために、30代の夫婦2組に子どもをつくらない理由、あるいは一人しか子どもをつくらない理由を取材しているが、それがなかなかおもしろい。第2回は「少子の時代をどう生きる」をテーマに、少子化が進むと社会はどのように変わっていくのか、その少子社会とどうように向き合い、乗り越えていけばよいのかを模索している。番組の冒頭では、合計特殊出生率が4.39という沖縄の伊是名島の子育て、つまり島ぐるみ、地域ぐるみでの「子どもは島の宝」という子育ての様子が紹介され、なかなか興味深い。

「揺れる男と女……NHK『性についての実態調査』より」は、NHKの4回連続の特集番組である。NHK『性についての実態調査』は、1999年11月～12月に実施された、日本で初めての性に関する実態調査であり、全国の16歳～69歳の男女3600人を対象にしている。82項目にわたる調査結果は、男女の性意識の違いを明らかにするとともに、今の日本社会の男女のあり方に疑問を投げつける数字を現している。4回とも調査結果に基づいて、ショッキングなタイトルがつけられており、第1回は「中絶経験43%」、第2回は「性的被害33%」、第3回は「10代の性体験36%」、第4回は「セックスレス19%」である。このうち、基礎演習では、「10代の性体験36%」と「中絶経験43%」をとりあげた。「10代の性体験36%」では、家庭や学校では十分な性教育が行われていない実態が明らかにされるとともに、小学生の低学年から性教育が行われている実例が紹介されており、注目される。また、「中絶経験43%」で驚くのは、30～40歳代の妊娠中絶が10歳代より多いことと、避妊が男性まかせになっていることである。

「子供を育てられない母親たち」は、民放の「ザ・スクープ」の特集番組である。「できちゃった結婚」などの若すぎる結婚が、子育てのできない母親たちをつくりだす。そして、「男は仕事、女は育児」の性別役割分業が、それに拍車を駆けている。また、愛情を受けて育てられなかった

子は、親になっても愛情のある育て方がわからないという、リサイクルの問題が提起されている。

「なぜ男の子が救えなかったのか」は、NHKの「クローズアップ現代」の特集である。義父から3年間暴力を受けて、ついに死亡した5歳の子どもの事件である。母親がわが子への夫の暴力をとめず、第三者には暴力ではないと夫をかばったという事実がやるせない。また、児童相談所の対応があまりにも遅く、男の子を義父の暴力から救えなかったという、日本の現実が情けない。

「真人君はなぜ死んだ」は、民放の「ドキュメント'99」の特集番組である。上記と同じ児童虐待事件を取材した番組だが、虐待をした義父とはどのような人間であったのか、義父はなぜ子どもに暴力をふるったのかなどについて、より詳しく取材をしていたので、2つの番組を比較する意味からもあえて取り上げてみた。

「妻を殴る夫」は、民放の「ニュース・ステーション」の中の特集である。妻に暴力をふるう夫の実態と、妻の恐怖が描かれている。また、アメリカでは、妻に暴力をふるえば警察に現行犯逮捕され、その後もカウンセリングを義務づけられるという、日本とは全く違う警察のドメスティック・バイオレンスへの対応が紹介されている。さらに、この番組では、30年間、夫に暴力をふるわれ続けてきた女性が登場し、その精神療法としての絵画療法が紹介されていたのだが、夫の顔が赤鬼のように描かれていたのが印象的であった。

「夫が妻を殴る時……崩壊する現代の夫婦像」は、民放の「ザ・スクープ」の特集番組である。3組の夫婦が登場し、夫が妻に暴力をふるう実態と、妻の恐怖がよく描かれている。しかし、「夫婦間暴力」を取り扱った他の番組との違いは、妻を殴る夫が登場して、妻に暴力をふるった理由を告白していることである。また、暴力を振るった夫が、妻に暴行を加えた事実を忘れてしまっているという、驚くべきことが明らかにされている。

Ⅲ. 学生による「女性学ゼミ」の評価（1）

学生が「基礎演習」における「女性学ゼミ」をどのように評価しているのか、2000年7月に受講生10名を対象にアンケート調査を実施した。回収率は100.0%である。

アンケート項目は四つである。

一つは、「あなたは基礎ゼミで『女性学』『男性学』を学んでよかったですか？」という問いに対して、「よかった、よくなかった、どちらともいえない」から回答を選択した上で、「具体的にどういう点がよかった（よくなかった）ですか？」と問うものである。

二つ目は、「ゼミでは10本以上のビデオをとりあげましたが、その中で印象に残っているのはどれですか？」というもので、ビデオのタイトルと感想を書くための回答欄を設けた。

三つ目は、「男らしさ、女らしさと性役割について、観賞したビデオをベースに、あなたの考えを述べて下さい」というものである。

四つ目は、「基礎ゼミについての要望を自由にご書いてください」というものである。

以下、アンケートの回答について、順次、紹介していこう。

(なお、第四番目の「基礎ゼミについての要望を自由にご書いてください」についての回答は、本稿では省略した。)

まず第一の、「基礎ゼミで『女性学』を学んでよかったか？」の問いに対しては、9名が「よかった」と回答し、1名が「どちらともいえない」と回答している。

具体的なよかった点について紹介すると、次のようなものである。

- ・「今まで自分が持っていた、女性はあるべきとか、男性はこうでなくてはならない、という性差別的な考えを改めることができた。今までこの考え方に疑問を持つことはなく、当たり前と思っていたけれど、今回ビデオを見て、男性とか女性とかいう性の前に一人の人間なのだ、ということに気づくことができたので良かった。」
- ・「ビデオを見て、私がまだ女らしさ、男らしさといった縛られた考えをもっていることに気づいた。また、そのような考えをなくさなければ性差別はなくなならないことに気づいた。」
- ・「男と女という関係を単純に考えていたが、実は複雑だなと実感させられた。例えば、結婚をするにしても、簡単に考えてはいけないなと思った。愛だけで夫婦はつとまるものではない。いつ夫が、あるいは妻が変わるか、分からない。いろいろな事実を知ることができて、勉強になった。」
- ・「今まで自分が思っていた『女性』と『男性』の違いについて、改めて学ぶことや考えさせられることが多かった。」
- ・「今まで真剣に女性と男性について考えたことがなかったので、『女性学』『男性学』を学ぶ機会がもてて良かった。」
- ・「今まで『女だから』という言葉や考えに対して、『男女平等なのか?』ということを考え、疑問でしかたなかった。その疑問を解くためのヒントを与えてくれたように思った。」
- ・「自分の中にある固定観念に気づくことができた。いろいろな考え方を学ぶことができた。」
- ・「いろいろなことに関して、今まで自分の中になかった考え方ができるようになった。」

IV. 学生による「女性学ゼミ」の評価 (2)

アンケートの二つ目の質問である「印象に残っているビデオ」については、次のとおりである。

第1位 (8名) 「ようこそ先輩 田嶋陽子が語る男と女」

第2位 (7名) 「男と女の境界線……その性を取りもどす時」

第2位 (7名) 「なぜ男の子が救えなかったのか」「真人君はなぜ死んだ」

小森：「基礎演習」における「女性学ゼミ」の実験（6）

- 第4位（6名）「揺れる男と女① 中絶経験43%」
第4位（6名）「子供を育てられない母親たち」
第6位（4名）「妻を殴る夫」「夫が妻を殴る時……崩壊する現代の夫婦像」
第7位（2名）「揺れる男と女③ 10代の性体験36%」
第7位（2名）「少子社会ニッポン① なぜ子どもは減り続けるのか」
第9位（1名）「おとことおんなの生活学④ 人生のパートナーを求めて」
第9位（1名）「オモシロ学問人生 男らしさにさようなら」

以下、順に、ビデオの感想を紹介しよう。

第1位（8名）「ようこそ先輩 田嶋陽子が語る男と女」

- ・『女性学』の教授としても活躍されている田嶋先生だけあって、とても分かりやすい、楽しい授業風景だった。授業の中で田嶋先生が出したひっかけクイズがあったけれど、私は見事にだまされてしまった。『医者』という言葉で連想されるのはなぜか男性で、クイズの答えを聞くまで自分の思い込みに気づくことができなかった。私はこのビデオの中でこのクイズの場面が一番印象に残っている。このビデオを見たことによって、自分が知らない間に持っていた、性に対する思い込みに気づくことができたし、考えることができたので良かった。」
- ・「このビデオは入学して3日目の霧島合宿で見たので、とても心に残っています。『ゼミとはどんなことをするのか?』という疑問の中で、新しく出会ったばかり人たちに自分の意見を言うことにはとても緊張しました。また、ビデオの中のクイズの答えに驚きました。自分の中にしっかりとした固定観念があったからです。男と女という性に大きな関心が生まれました。」
- ・「このビデオはゼミの授業が始まって初めてみたビデオだったので、とても印象に残っています。田嶋陽子さんの話を聞く中で、私も『男だから～』『女だから～』の考えをもっている1人だったので反省しました。」
- ・「私は、田嶋先生のクイズにまんまとひっかかったことを今でも覚えている。そういう思い込みをなくしたいと思った。」
- ・「短大に入ってはじめて『女性学』『男性学』について学ぶと聞かされて、はじめは難しいかもしれないと思っていた。田嶋さんが出題したクイズはかなり心に残っている。自分の考えや価値観などを考えさせられる一本だったのではないかと思った。やはり自分の奥底では、『男はこうであり、女はこうである』という固定観念のようなものができていると感じた。」
- ・「初めて女性と男性について真剣に考えた。田嶋さんが『女性学』を教える教授であることをはじめて知った。幼い頃に『女だから』という理由で経験した悔しい思いを、今でも思い出すと

悔しいと言って涙ぐんでいる姿がとても印象的だった。そういう思いがあるから、『女性学』についてあんなに主張しているのだなあと思った。」

- ・「ビデオの中で田嶋先生は、学生の時に先生から『女は生理がくると成績が下がる』と言われ、ひどくショックを受けたと語っていました。もし私が同じことを言われていたら、傷ついて立ち直れなくなっていたと思います。私は、『男の方が女よりもエライ』とか、『女に産まれて損をした』と思ったことは一度もありません。逆に、女の人に産んでもらいながら、自分の方がエライと考える男の方が、もっと愚かな人間だと思います。」
- ・「田嶋陽子先生が小学生と話す中で、『男らしさ』『女らしさ』という言葉があたりまえのように出てくる。しかし、その『らしさ』という言葉の裏に隠された、男女間の格差のあらわれに気づいた時、あたりまえように使ってはいけないと感じた。」

第2位（7名）「男と女の境界線……その性をとりのどす時」

- ・「このビデオの感想は、一言で言うと『かわいそう』でした。自分の心は女でも、体が男だと、周りから変に思われるし、私は耐えられないと思いました。それと同時に、このような人がたくさんいることにも驚きました。」
- ・「男の体に生まれて、体つきも何もかも男なのに、内身は女……、そんな人を初めて見ました。声も女性のように高く、行動も女のように、びっくりしました。今までに自分の性を疑問に思い、悩み、死んでしまおうかと思ったこともあるのに、今は前向きに生きている……という姿勢にとっても感動しました。自分はこんな風に強く生きることはできないかもしれないなと思いました。」
- ・「ゼミで見た10本以上のビデオの中で一番私には衝撃的だった。体は男で心は女、またはその逆である人が、堂々と話をする姿はすごいと思った。自分だったら耐えられず、何も前向きに考えられないだろう。」
- ・「私は、性同一性障害で苦しんでいる人々をビデオで見て、はじめはただ驚いた。声や振る舞いは女性なのに、外見は男性という人がでてきて、初めはすごく偏見の目で見ていた。しかし、死ぬほど苦しんでいる人たちを目のあたりにして、今までは『女』であることを普通のこととしかみていなかったことに気づき、もっと広い心で性同一性障害で悩んでいる人々を理解していこうと思った。」
- ・「ビデオで見た目には男なのに心は女という人の話を聞いていて、彼らはその自分の体のギャップのせいで就職も決まらなかったり、自分自身を好きになれなかったりと、いろいろ苦しい思いをしてきたことがよく伝わってきたし、中には性転換を行った人もいたぐらいでした。私はこのビデオを見て、『こういう人もいるんだ』と衝撃を受けました。」

小森：「基礎演習」における「女性学ゼミ」の実験（6）

- ・「何と言っても衝撃的なビデオでした。私は今まで生物学的な性でしか男と女を区別していなかったからです。このビデオを見ていなかったら、私はこの先ずっと性同一性障害を『気持ち悪い』と感じながら生きていたでしょう。」

性同一性障害を自分の身の上におこっていることと考えると、随分悩んでしまいます。『体の性』に従うと自分らしく生きていないような気がするし、『心の性』に従うと社会や親に対して後ろめたさを感じて生きていくことになります。今、性同一性障害で悩んでいる人たちを救うには、自分の性を自分で選択することのできる社会をつくるのが大事なのではないかと思います。」

- ・「とにかくいろんな意味でショックだった。今までも『性同一性障害』という言葉聞いたことはあったけど、実際にそういう人たちがいるという実感がなかった。社会に受け入れてもらえなくても、自分で選んだ性別で自信をもって生きていっている人たちの心の強さがすごいと思った。」

第2位（7名）「なぜ男の子が救えなかったのか」「真人君はなぜ死んだ」

- ・「児童虐待の問題が、最近、頻繁におこっているのは知っていた。しかし、子どもを死に至らせるまで虐待を続ける大人や親の気持ちは理解できなかった。熱湯をかけ、気を失うまで殴る、目の前でわが子が暴力を振るわれているのを見ながら、何もできない母親を本当に許せない。弱い者にあたりいじめる姿は、まるで子どものようで、精神年齢の発達した大人とは思えない行動である。また、唯一の救済の場であるはずの、児童相談所のいい加減な対応にも腹が立った。やはり周りの大人が小さな子どもの生命を守りあっていかなければいけないと思った。」
- ・「私はビデオを見て、『こんなひどい話はない』と思いました。義理の父親から虐待をうけていて、ごはんも一日一食で、最後はこっそりカレーを食べていたところを見つかってしまい、『おなかがすいた……』と言いながら亡くなったそうですが、母親は自分の息子がこうなってしまうまで黙って見ていたのか、何かしてあげられたはず……と悔やみきれない気がします。」
- ・「今まで見たビデオの中で一番衝撃を受けた。父親が一番悪いが、私は母親を責めたい。自分のおなかを痛めた子どもをどうして守ってあげられなかったのか。短かった真人君の人生は何だったのだろうと思う。こういう言い方はよくないが、逆に真人君は死んでしまっただけよかったのかもしれないと思う。あれ以上、つらい思いをしなくてもするからである。自分は本当に親に恵まれて幸せだと実感させられた。」
- ・「自分の子どもを一度ではなく何度も、しかも周囲の人が気づいてどうにかしてほしいと助けを求めるほどひどい虐待をくり返していたことが信じられず、印象に残った。自分の子どもといっても血のつながりがいいからなのだろうか。真人君は逃げ場もなかっただろう。とてもかわい

そうだった。死ぬ前に救ってほしかった。」

- ・「児童虐待という悲しい行為のために亡くなった真人君がかわいそうでした。親子の間であんなにも惨い暴力が行われることが信じられませんでした。3歳の頃から虐待を受け、5歳のときに亡くなって、たった5年間という短い生涯だった真人君は、どんな気持ちで亡くなったのかと思うと、胸が痛いんです。母親が自分の実の子をどうして助けてあげられなかったのか、不思議でした。行政の対応には腹が立ちました。」
- ・「このビデオはとても衝撃的でした。この虐待に気づきながら、止めることができなかった児童相談所や母親が信じられませんでした。真人君を死ぬまで虐待し続けた父親については、どうしてそこまでする必要があったのか、私には考えられません。5年間という生涯で、真人君は何か楽しくて笑えるようなことがあったのかと思うと、かわいそうでしかたありません。」
- ・「真人君を虐待し死に迫いやった義父に対してはもちろん、その虐待を見てみぬふりをしていた実母に対して腹が立った。実母は自分と血のつながっている真人君が、目の前で虐待されているのを何回も何回も見ていたはずなのに、どうして助けてあげられなかったのだろうか。本来、母親というものは、子どもを他のものから守ってあげるものなのに。」

第4位（6名）「揺れる男と女① 中絶経験43%」

- ・『『中絶』と聞くとどうしても若い人たちが思い浮かんでしまうが、30代、40代の人意外に多かったのが驚いた。私がまだ経済的に親から自立していないからかもしれないが、経済的なことを理由に中絶をするというのは信じられない。

男性にとっては、妊娠は自分の体でおこなうことではないから、女性が心配する以上に無責任なのだと思う。悩むのは結局女性なのだから、女性はもっと避妊に対する自分の意見を持つべきだ。避妊は思いやりと責任の証しだと思う。」

- ・「まず私は中絶経験者が43%もいることに驚きました。しかも、ビデオを見てみると、中絶することを軽く考えている人も多く、私はこの実情に少しショックを受けました。」
- ・『『43%』という、あまりにも高い数字に驚きました。避妊についての意識が全くなく、『子どもができたら中絶すればいい』という考え方にも腹が立ちました。避妊を男だけに任すのではなく、女も意識するべきだと実感しました。もっと公に性教育を行い、日本人の考え方をしっかりさせなければいけないと思いました。」
- ・「まずタイトルを見て驚いた。約2人に1人が中絶を体験していることになる。しかも、若者よりも30代や40代などの年配者に多かった。経済的理由というのは仕方がない気もするが、生まれた命をそう簡単になくしていいのだろうか。そうせざるをえないことが分かっているなら、子どもをつくらないように、対策をしっかり取るべきであると思った。」

- ・『「女性の約4割が中絶を経験している」とは驚きました。その人たちのほとんどが望まない妊娠で、中絶しています。妊娠したくないなら、避妊をするべきです。ピルが解禁されて、服用者も増えてきているみたいなので、これから少しでも望まない妊娠で中絶をするような人が減ればいいなと思います。』
- ・「私は中絶に対して抵抗がある。小さな命、一人の人間を殺すことにはかわりはないし、体にもよくない。『望まない妊娠』だからとか、若すぎて育てられないとか、身勝手なことばかりして、簡単に中絶してほしくない。中絶に対する男性の態度にも驚いた。避妊をするとかして、中絶することはなるべくやめてほしいと思う。」
- ・「私がまず驚いたのは、中絶経験43%という数字だ。妊娠した人のほぼ半数が中絶をしていることになる。避妊の方法が日本は男の人まかせであるということも、中絶をまねいているそう。女の人が苦しむのであるから、避妊も相手まかせにしないということを考えさせられた。」

第4位（6名）「子供を育てられない母親たち」

- ・「このビデオを見て、ネグレクトな母親たちに対し、はじめはイカリを感じた。しかし、その根底となる母親たちの心の中に、子どもの育て方、接し方が分からないということを知り、私も人と接することが苦手で、それは接し方が分からないということからきている。だから、根底となるものが私に似かよっていて、同情の念に変わった。」
- ・「自分のおなかを痛めて産んだ子がかわいいと思えないと言う母親がいました。それを子どもが聞いたらどう思うのでしょうか。生まれてこなければよかったと私なら思います。子どもがかわいそうでしかたがありませんでした。」
- ・「私は子どもが絶対ほしい。しかし、子育てを甘くみていた部分があったのかもしれないと考えさせられた。言葉をまだ話せない子どもに『なぜ泣くの？』と聞いても、いけないことを注意しても分かってもらえない。イライラする。子育てにはかなりの体力と忍耐力が必要だなあと考えた。」
- ・「ビデオの中に出てきた母親たちは、みんな自分の母親に可愛がってもらった覚えがないという点が共通していた。女の人には生まれながらにして、母性が備わっていて、母親になったら子育てができるのが当たり前みたいな考えがあるけれど、あくまでもそれは親に愛されて育った人の場合だと思う。親から愛されて育ったと思えない人が、子どもにどう接したらいいのか分からないのは当然だと思う。『何で自分の子どもを育てられないんだろう』と母親たちを少し責める思いがあったけれど、ビデオを見ていくうちに母親だけに問題があるんじゃないということに気づくことができてよかった。」
- ・「自分が小さい頃母親にどういう風に接されたか覚えていない人が、子どもを産み育てる時、

『全くかわいくない』とか、『産まなければよかった』などと言っている姿にびっくりしました。はっきり言って、『そんな人は子どもなんて産まなければいいのに!』と思いました。産まれてきた子どもがかわいそうです。育児を放棄して遊びに出かけて、帰ってきたら子どもが死んでいた、こんなことが起こるような社会に疑問を感じました。」

- ・「今、子どもを育てられない母親が増えているといいます。その原因の一つに、私は本当にほしいと思って産むのではなく、できてしまったから仕方なくという人も多いからだと思います。また、相談相手がいないのも原因だと思います。」

第6位 (4名) 「妻を殴る夫」「夫が妻を殴る時……崩壊する現代の夫婦像」

- ・「ビデオの中の、夫に暴力をふるわれている妻と、夫との話し合いの場面で、妻にふるった暴力に対する夫の認識が、全くと言っていいほどないことにとても驚いた。私は、なぜ自分の妻に暴力をふるうのか、最初のうちは不思議に思っていたけれど、この暴力をふるう夫たちの性格の共通点を知って理由が分かった。自分自身が家庭内暴力の行われていた家で育ったこと等によって、暴力に対する認識がないということと、感情を言葉でうまく表現できないこと、暴力を学習してしまっていること等が共通していた。アメリカのマサチューセッツ州では、このドメスティック・バイオレンスへの対策が進んでいて、女性に対する暴力禁止の法律が定められている。日本も米国を見習って、法律を定めるべきだと思う。そうすれば、暴力を受けている妻が警察に助けを求めれば、何らかの対策がとれるだろうし、夫に対して刑事責任を負わせることもできる。また、暴力をふるわれた妻に対してだけではなく、暴力をふるった夫に対してのカウンセリングも行っていけばいいと思う。そうすれば、家庭内で暴力をふるう夫も減っていくと思う。」
- ・「結婚するまで分からなかった、夫の本性が怖いと思いました。ビデオの中で、夫に殴られている時の絵をかいている人がいましたが、私はそれに衝撃を受けました。また、殴られた妻はあんなに覚えているのに、殴った夫は覚えていないという発言もあって、驚きました。」
- ・「夫から虐待を30年間受け続け、ついに逃げ出したという女性の姿がとてもかわいそうでした。夫から受けた暴力を絵にあらわし、今でもおびえながら生きている姿が印象深かったです。なぜ夫は暴力をふるうのか、その心が理解できません。好きあって結婚したのだから……。結婚が怖くなってしまいました、というのが正直な気持ちです。」
- ・「夫が妻を理由もなく殴るという、こんな最低なことはないと思う。私は父が母を殴るところを一度も見たことがない。夫の暴力から逃げられない妻たちがたくさんいる。逃げたくてもまた追いかけてくるかもしれないという恐れを抱いている妻たちのためにも、日本でも早く法律ができてほしい。暖かみのある夫婦になれるように、皆、努力することも大切だと思う。」

第7位（2名）「揺れる男と女③ 10代の性体験36%」

- ・「援助交際など、誰とでも平気で性交ができるという、自分と同じ年代の人たちがこんなに多いのを見て、ショックを受けた。お金のためであっても、自分はこんな風にはなりたくないと思った。」
- ・「私は、10代で性体験をすることに関しては何も思いません。愛のあるセックスならしてもいいと思います。でも、男性の中には、性的快楽、征服欲を目的にセックスをする人もいて、びっくりしました。そういう理由でセックスをしていて、悲しくならないのかと思いました。」

第7位（2名）「少子社会ニッポン①・なぜ子どもは減り続けるのか」

- ・「女性が社会で活躍するようになってから、経済的に男性に頼らなくても生きていけるようになって、晩婚化が進んでいる。ビデオの中では、このことも少子化の原因の一つに取り上げられていた。全国の都道府県によっては、少子化の問題に対して積極的に取り組み、男女の出会いの場を設けたり、保育施設を整えたりなどしているところもあった。私は結婚したからといって、絶対に子供を産まなければならないとは思わない。産む、産まないは本人たちの自由だと思う。でも、日本はまだ『女は子どもを産むものだ』的な考えが残っていると、このビデオを見て思った。少子化の問題は、たしかに不況や女性が自立してきたこともあげられるけど、日本にまだ残っている、『子育ては女がするもの』という考え方にも問題があると思う。子育ての大変さを男性ももっと理解し、協力できるように社会全体が変わればいいと思う。」
- ・「夫婦が話し合って『子どもはつくらない』と決めたのなら、それでいいじゃないかと反論したくなりました。子どもを育てるのは簡単なことではないのだから。日本政府は子どもの数を増やすことだけにとらわれていると思います。私は、『少子化に歯止めをかける』ことよりも、『子育てを充実させる』ことのほうが大事なのではないかと考えています。」

第9位（1名）「おとことおんなの生活学④ 人生のパートナーを求めて」

- ・「結婚しない若者の増加。『私もその中の1人になるかもしれないなあ?』とビデオを見ながら思いました。結婚に憧れはあるけれど、結婚することで自分の時間がなくなり、何もかも拘束されてしまうのは嫌だからです。世の中の男性には『家事イコール女』という考え方がまだまだあるようなので、『そんな男とは結婚したくないなあ……』と思いました。昔の人の考え方は『やっぱりなあー』と思うような発言が多いようでした。仕方ないことなのかな??」

第9位 (1名) 「オモシロ学問人生 男らしさにさようなら」

- ・「私は今まで、男女差別は女性が一方的に弱く傷ついている存在だと思っていた。しかし、男の人にも「男らしさ」という鎧、メンツに縛られていることを知り、『らしさ』という言葉は男女ともに重いものとなっていることに気づいた。」

V. 学生による「女性学ゼミ」の評価 (3)

最後に、「男らしさ、女らしさと性役割について、観賞したビデオをベースに、あなたの考えを述べなさい」という質問に対する回答は、次のとおりである。

- ・「現代社会の中では、男と女という2つの性においての区別がはっきりとされています。『ジェンダー』という言葉で表されますが、『女だから、男だから』『女のくせに、男のくせに』『女らしく、男らしく』という言葉はよく耳にします。

実際に私も『男性学』や『女性学』を学ぶまでは、男らしさや女らしさにこだわっていた部分もあったと思います。例えば、『男らしい人』という言葉の意味を理解する時、今までは『体が丈夫で、大きくて、頼りがいがある……』などというイメージでした。でも、それって本当は『男らしい』とか、そういうものではないことに気づきました。私は女だから、『女性学』の方は共感できることが多かったです。一番身近に感じたことの中で、まず会社の中でのお茶くみやコピーなどの雑用は、女性の仕事になっているし、女性だけに制服がある。女性には重要な仕事をまかせられないと思われていたり、宴会などの席では女性にお酌などをさせたりしています。私たちの生活の中には数限りのないジェンダーがあることに気づきました。また一方で、『男らしさ』というものに縛られて悩んでいる男性も少なくありません。怒りや悩みを見せず、強い男を演じていることに疲れを感じ、また企業社会の日本でリストラ、過労死、定年離婚など、男性の抱える問題もさまざまです。ジェンダーに縛られて、人間らしく生きられないとしたら、それはとても不幸なことです。性別にこだわらず、とらわれずに行動し、女らしさ・男らしさに縛られず自分らしく生きることは、とても大切なことだと思います。また、現代社会の中で活躍しているキャリア・ウーマンにとっても関心があります。『女は家で家事をして、子育てをする』という考えには大反対です。私は子育ても家事も仕事も全部こなしたいと思います。『欲張りだ』と私の父は言いますが、決して欲張りなことではないと思います。男性の協力があれば……。もし子どもが風邪をひいて、会社を休まなくてはならなくなった時、女性が休むのが当たり前のように考えられていますが、それも間違っていると思うのです。これからは『ジェンダー・フリー』の時代です。昔の考えを捨てて変わらなくてはいけないと思います。『男

も女も、家庭も仕事も』、すべてがうまくいくと思います。」

- ・「私が今まで考えていた『男らしさ』『女らしさ』や性について、ビデオを見る中で大きな違いが生まれてきた。今までの私の中での『男らしさ』を一言で表すと、“強い”であった。よって、男が泣くことは格好悪く思えた。また、『女らしさ』を一言で表すと、男より“弱い”であった。すなわち、女は強気な態度をとるべきではないと思っていたのである。そして、男は外で働くことが望ましく、女は家で家事をすることが望ましいと思っていた。いわゆる典型的な日本の考えである。そして、それについて深く考えることもなかった。しかし、ビデオを見ていくと、男が泣いたらいけないのか、女が強いといけいないのかという具合に、私の考えに疑問が出てきた。専業主夫という人も紹介され、私は自分の考えが間違っていることに気がついた。そして、男だから～、女だから～と考えるのは、もうやめるべきだと思った。

次に、性について述べたいと思う。まず、10代の性体験が36%というデータに注目である。10代とは、私の中ではまだまだ子どもであるし、『もし妊娠したら……』と考えると怖くなるはずである。また、性行為をする理由に、女の子は“愛”があるのに対して、男の子は“欲求を満たすだけ”とあり、恋人だけではなく他の女の子とも性行為をしていることに驚き、これが実情だと思うとショックを受けた。また、この軽い気持ちの延長線上に、望まない妊娠があることも忘れてはならない。実際に、中絶経験43%というデータが出ている。私はまずこの数の多さに驚いた。しかし、それ以上に驚いたのは、中絶した人に罪悪感がないということである。『妊娠したからおそろ』、これが悩むことなく簡単にできてしまうのである。私はもっと自分を大事にしてほしいと思った。

次に考えるべきなのは、児童虐待についてである。自分が産んだ子どもに対しても暴力をふるう。私は考えられないと思った。また、最近暴力の反対とも言えるネグレクトも増えているという。私は、子供の立場からすると、暴力もつらいが、ネグレクトもかなりショックだと思う。このような子どもを育てられない母親が増える背景には、相談相手がいないなどの理由もあると思うが、望まない妊娠・出産が少なからずかかわっていると思う。しかし、どんな理由があっても、自分で産んだ子どもは最後まで責任を持って育てるべきであると思うし、それが理想の母親像であると思う。

今まで見たビデオは、男と女が共生していく中で発生する問題が取り上げてあった。これからの人生で、いつ私がこれらのビデオの主人公になるかわからない。後半のビデオの主人公にだけはならないように、素敵な人生のパートナーを見つけたいものである。」

- ・「私は男らしさ、女らしさという考えはあまり好きではない。そういう固定観念のない社会になってほしい。職場でも、やはり女性が粗末に扱われることが多い。結婚をしたら女性が子育てを

しないといけないとか、家事をしなくてはいけないとか、こういう考えを早く直してほしい。男だから働いて家族を養わなければいけないと言うが、別に妻が働いて夫が家事をしてもいいわけである。ビデオの中でも、妻が働き夫が家事をするという夫婦がいた。こういう夫婦がもっとたくさんいていいと思う。

男と女、お互いに最低のルールを守って、自分の行動に責任をもてるようになることが大切だと思う。男だから、女だからという固定観念は捨てて、自分がいいと思った生き方をしてほしい。ビデオの中であったのだが、男に生まれたのに、自分は女性として生きていくと決心した人がいたが、そのことを尊重しなければいけないと思う。自分も見た時は『気持ち悪い』と思ったが、話を聞いているうちに、その男性に対する思いが変わった。

男、女という性別は、生まれた時にどうしても決定されてしまうものであるが、自分らしく生きていけることが一番いいと思う。」

- ・「いろいろなビデオを見てきて、今まで何の疑いもなくもっていた男らしさや女らしさについての考えが変わった。男だから男らしくしないといけないとか、女だから女らしくしないといけないという、性差別的な考え方は何か違うなと感じるようになった。なんで『男らしい』とか、『女らしい』という言葉があるのか、疑問に感じることもある。男も女も性別は違っても同じ人間だし、体格に違いはあっても中身は一緒だと思う。昔は、男は外で働いて、女は家を守るというような性役割があった。でも今は、女性の地位も段々と確立されてきているし、今の社会で必要なのは、『男らしさ』や『女らしさ』等ではなくて、『自分らしさ』だと思う。もう昔のように、男が男らしく、女が女らしくいる必要がなくなっている。

共働きの夫婦で、家事を分担したり、夫が育児を手伝ったりするのは、パートナーとして当然だと思う。ビデオに出てきた、妻より出勤時間の遅い夫が、洗濯や皿洗いを済ませてから出勤するシーンがあって、とても感心した。本当は当たり前のことだと思うけれど、日本人の男の人は、まだまだ家事を奥さんにまかせきりの人が多い。でもこれからは、亭主関白などと言っていないで、ビデオに出てきた夫婦みたいに、役割を分担するべきだと思う。

最初に『男らしい』『女らしい』という言葉を否定したけれど、やはり男性だからできること、女性だからできることはあると思う。女性ならではの細かやかな気配りや、男性だからつとまる力仕事もその中に入る。現に今の社会では男性が活躍している職業と、女性が活躍している職業が別れている部分もある。普通の企業で、能力はあるのに女性だからといって昇進できなかったりするの『性差別』だけれど、男性は女性にはない持ち味、女性には男性にはない持ち味を活かすことはいいことだと思う。これからは、自分の性の個性を活かしつつ、男性と女性が共に助け合える社会になってほしいと思う。」

- ・「男女平等が世間で主張されるようになってから、女性の社会進出が進み、それが身近でも感じられるようになった。例えば、電車の運転手や国会議員など。しかし、完全な男女平等は難しいと思う。なぜなら、男と女は体のつくりが違う。同じ力仕事をするとしたら、きっと女性の方が負担が大きいだろう。だからといって、同じ仕事をするのに女性の方を高収入にするのは平等とは思えない。高校生の時に感じたのは、服装検査の髪型である。女の子は髪は肩につくまで良いのに、男の子は耳についただけでダメらしい。やはり男らしさ、女らしさというものがあるからだと思う。

私は、ゼミでビデオを見て本当によかったと思う。自分の考え方が変わったし、男と女の性についてこんなに真剣に考える機会がなかった。今までは、一旦は就職しても、結婚したら子どもを産んで、仕事をやめて……という考え方でしたが、自分も働くことに生きがいを持てる人でいたいと思った。そういう考え方を理解してくれる人に出会うまで、簡単に結婚するのはやめようと思った。完全な男女平等は難しいと思うが、社会の制度などが女性の社会進出を支援してくれることはとてもよいことだと思った。」

- ・「私はゼミで男らしさ、女らしさに関するビデオを見てから、自分が今まで何とも思っていなかった考えが、自然と昔からの縛られた考えだったことに気がつきました。口では男女平等と言いながら、何かと『男性』『女性』といった性別を気にしています。みなさんそうじゃないでしょうか。やっぱり心のどこかで、『男性』または『女性』を意識しているのではないのでしょうか。それは自分たちの親からのしつけや、体のつくりから生じると思います。私たちは親に『男らしく』または『女らしく』育てられ、成長していくうちに、男性は筋肉がつきたくましく、女性はしなやかできめこまやかになります。そこから自然と男性は外で働いて一家を養い、女性は家で家事・育児に専念するといった、古典的考えが発生するんだと思います。これまで、性差が理由で女性が不公平に扱われたり、逆に男性が『男らしさ』に縛られた生き方を強いられてきました。このことを見直さなければ、性差別はなくならないと思います。私たちは男女関係なく、一個人として自分の個性を大事にし、次の世代に伝えていきたいです。」

- ・「男女平等を掲げながら、『男らしさ』『女らしさ』という考えは生きている。『男らしさ』という鎧を着た男の人たちは、過労死やリストラといった問題でそれまでの生き方が行きづまったりする。また、『女らしさ』という言葉により行動に制限を加えられ、『男らしさ』『女らしさ』という言葉の枠内にいて、悩んだりするということがおこる。日常当たり前のように言われるこの言葉の重さを知った時、私はこれからは『男らしさ』『女らしさ』ではなく、『自分らしさ』が大切だと思いました。

男と女という、性による問題点の多さを知りました。男と女の境界線に立つ人、中絶を経験

する女の人、子どもを育てられない母親、児童虐待。これらの問題の根底には、性の役割がかかわっているように思います。

男性と女性の区別をはっきりさせればさせるほど、その問題は深くこじれてしまうように思います。外面から違うところはあるかもしれませんが、内面において区別するとしたら、『らしさ』につながってしまいます。母親が悩むという子育ての問題は、『女性は内』と決めつけることによって生じた問題です。一方に負担がいくのなら、もう一方がそれを支えるといったことができるようにならなければ、性の役割は悪い方にしかいかないと思います。

男と女、この二つしかないものを一つにくくると人間。私は同じ人間という視点から性の役割を考えていけば、それが理想の姿であると考えます。」

- ・『～らしさ』という言葉は、男らしさ、女らしさに限らず、その人を型にはめ込んでしまうような気がします。自分では意識していなくても、人に『あの人は～らしい』と言われると、ずっとそのイメージがつきまとして、それがその人のすべてかのように思われたりもします。人は『男らしさ』『女らしさ』を意識していないつもりでも、無意識のうちに意識しているものです。また、意識して男と女を差別している人もいます。男とか女とか関係なく、1人の人間としてすべての人に平等に接することが一番いいということに気づいてほしいです。だけど、男と女には根本的な違い、体の構造や力の差があります。その違いを見つけることは差別ではないし、どっちが優れ、どっちが劣ると決められないし、決めることはありません。お互いの違いをよく知り、そのうえで助け合い協力していけばいいと思います。」
- ・「男の子は生まれた時『ブルーの服』、女の子は『ピンクの服』をよく贈る。高校の英語の授業にもでてきた。男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく、という言葉聞いて育ってきた私たちには、性の違いによって役割や職業、外見などさまざまな固定観念が植えつけられている。確かに、男の人が女の人のお化粧をしたり、口紅をしたり、女装をしていたら、誰しもが特異な目でその人を見るだろうし、力の差から女の人が労働する時間や量には限りがある。私もある程度の女らしさ、男らしさは大事だと思う。極端に私は『人間らしく』ありたいと言われたところで、やはり世の中は男と女に分かれているように思うからだ。男らしさ、女らしさというのは個人によって感じ方が違うので難しい問題ではあるが、男と女の枠を超えた（特定の性を超えた人間）だけになったらどうなるだろうと考えた時、やはり性区別は大事な問題であると思う。しかし、その性区別の問題で生と死の境をさまよって生活している人々を見ていると心が痛んだ。私には、『自分が女（男）で生まれてきたのに、いつかは男（女）に変わっていくんだ』という気持ちは、味わったことのない理解しがたい問題である。親からもらった体にメスを入れていいと思うかもしれないが、彼ら彼女たちにとってはメスを入れ性を

変えることによって『やっと本物の人間になれる』『自分になれる』という手段なのではなかつた。私は体の構造の違いから、女らしさ、男らしさは養われていくものだと思ってきた。しかし、それと反比例に、性同一性障害者の人々の悩みが増えていく姿は、とてもすごいものがあつた。

私としては、広い心を持って性同一性障害の人々を受け入れていきたいと思っているが、やはりその人を実際に目の前にした時、偏見のまなざしでみないという保障はない。しかし、そういった悩みで苦しんでいる人々がいることだけは心にいれていきたいと思った。」

- ・「基礎ゼミの時間に観賞したビデオでは、『男らしさ』『女らしさ』にとらわれず、『自分らしく』していたいという意見がほとんどでした。しかし、私の場合、『女らしく』しなさいと言われても、少しも苦痛は感じません。自分らしくすることが、女らしくすることにも結びついているからです。

『男らしく』『女らしく』することと『自分らしく』することが、必ずしもかけ離れたものであるとは限らないような気がします。一般に考えられている『男らしさ』や『女らしさ』にとられるのではなく、男らしさや女らしさといったものを『自分らしさ』の中にとり入れて、『自分が考える男らしさ』『自分が考える女らしさ』を大切にしていっていいのではないかと私は思います。

今回、多くのビデオを見てきましたが、妊娠・出産・育児といったテーマのものは、ほとんどが『女性の抱える問題』として取り上げられていたような気がします。これからは、『育児に悩む夫、それを支える妻』『育児休業中の夫の悩み』といったことが問題になるくらいの社会になってほしいです。」

おわりに

全体の感想を言わせてもらえば、当初の目的である「女らしさ」「男らしさ」についての刷り込まれた固定観念を突き崩すということには、まあ成功したようである。

しかし、ビデオ観賞中心の12回のゼミナールでは、「女性学」と「男性学」の基本文献を学びつつ、討論で深めるということができていないので、とくにセックス（生物学的な性）とジェンダー（社会的・文化的な性）の違いに対する理解が十分とはいえない。多くの誤解を含んでいることは読まれればわかると思う。また、情報化社会が進めば進むほど、労働にあたっての肉体や筋力の男女の差がますます問題とはなくなり、男女平等の社会へと進むと私は思うのだが、そういう理解は彼女たちにはあまりないようである。

何はともあれ、基礎演習を終えた今の私としては、あと1年半ある短大での学習・研究・討論

の中で、彼女たちが「女性学」と「男性学」をさらに深めることにより、これからの人生を主体的に選択しつつ、しなやかにかつしたたかに生きぬく指針と方法を会得されんことを、強く希望するものである。